

旭川の体育の実践

中学校部会研究部長 旭川市立六合中学校 五十嵐 敬
2019.12.13

1 旭川支部の研究について

旭川支部研究主題 「自ら求め、積極的にかかわる体育活動」 ～わかる・できる・のびる体育学習を目指して～

研究仮説

指導内容やかかわらせ方を工夫することにより、基礎となる運動技能を身につけたり、体力を高めたりするとともに、自ら運動を求め、積極的にかかわろうとする態度を育てることができる。

研究の視点1～指導内容の工夫	研究の視点2～かかわり合いの工夫
① 実態を踏まえた指導計画の作成 ② 目標の明確化，焦点化 ③ 場づくり，教材・教具の工夫	① 教師と子どものかかわり合い ② 子ども同士のかかわり合い<重点> ③ 子どもと運動とのかかわり

2 令和元年度旭川市教育研究大会

(1)期 日 令和元年10月16日(水)

(2)授業公開

旭川市立共栄小学校 松本 祐士 教諭 第3学年 小型ハードル走
旭川市立東鷹栖中学校 宮本 廉 教諭 第2学年 武道(柔道)

3 各授業の内容・考察

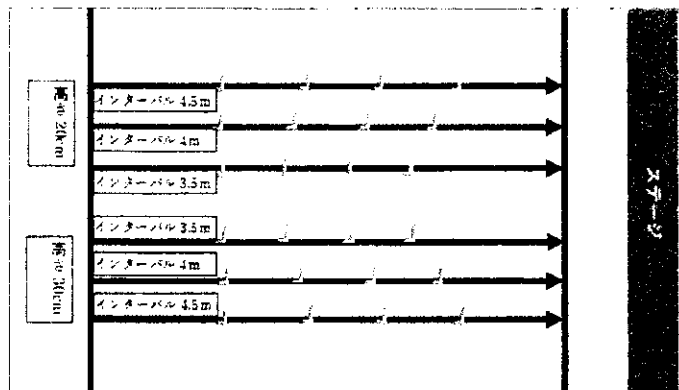
(1)小型ハードル走

①単元について

ハードル走の特性は、「仲間と競ったり、自分のタイムを縮めたりすること」と考えるが、「友達と競う」という他者との比較に抵抗がある児童もいる。そこで、「ハードルを調子よく走り越すことの心地よさ」を運動の特性と押さえ、児童全員がその心地よさを実感することをねらいとした。また、「小型ハードルの授業が楽しかった!」と思い、ハードル走に対する苦手意識を生まないように意識した授業を行った。

②本時の展開(4/5)

3・4時間目の2時間で、「調子よく走り越すことの心地よさ」を実感させた。調子よく走り越すとは、「リズムよく」「スピードに乗る」「気持ちよさ」を合わせたものと定義し、そのためにはどのような条件が必要であるかを追求していった。児童は、何度も小型ハードルのコースを走って試行錯誤したり、友達と話し合ったりしながら、「ハードルの高さ」と「インターバル」を揃えると調子よく走り越すことがで



きることに気付いていった。

本時は「一番調子よく走れるコースを見付けよう！」という学習課題で、自分の体格や走る速さに合った「高さ」と「インターバル」を見付けていった。課題解決場面では、「タ・タ・ターンの同じリズムで走り越すと気持ちよかった」「タ・タ・ターンのリズムで走り越すとスピードに乗れた」など、オノマトペを使いながら、ハードルを走り越すリズムを意識した発言をすることができていた。

③考察

児童は、飽きずに何度も小型ハードルを走り越す姿が見られ、小型ハードルの特性を味わうことができていたと考える。課題としては、友達同士でハードルを越す姿を互いに見合うような場や視点が足りなかったため、自分がハードルをリズムよく走り越すことができたかどうか理解する手立てが不足していた。「友達とのかかわり」によって課題を解決することについての研究を深めていきたい。

(2)柔道（武道）

①単元について

柔道の授業における固め技の指導においては、技の行い方が中心となっているが、本時においては「けさ固めの返し方」に焦点を当てた。受が取にけさ固めで抑えられた状態から、抑え込みの条件が満たされなくなった瞬間を「返した」とおさえ、効果的な返し方について、個人で考えたり、グループで交流する中で自己の考えを広げたり、深めたりする場面を設定した。

②本時の展開（8/12）

第6時で「けさ固めの抑え方」、第7時で「横四方固めの抑え方」を学習した。本時の目標を「けさ固めの攻防において、受側の運動の取り組み方を工夫することができる」とし、展開部分の流れは【①個人思考／②集団思考／③思考のまとめ】とした。各学習場面における具体的な内容を以下に示す。

■個人思考

- ①T1の指導者が、T2の柔道有段者をけさ固めで抑え込んでいる状況において、T2が返す場面を観察する。
- ②観察で気付いたことをヒントとし、ペアで実践しながら、一人ひとりが効果的な返し方について考えをもつ。

■集団思考

- ①グループ（3～4人／柔道の試合は階級別で行われるため、体格は同程度）で、受と取を交替しながら、個人で考えたことを実践するとともに、仲間が考えた返し方について聞いたり見たりすることを通して多様な見方・考え方に触れ、思考を広げたり、深めたりする。
- ②グループvsグループで10秒間の簡易試合をし、ゲーム形式の実践で試す。

■思考のまとめ

- ①効果的な返し方について全体交流（複数の生徒からの発表）をする。
※生徒の発表内容と効果的な返し方の例、既習の知識である「抑え込みの3条件」を関連させたまとめをする。

③考察

個人思考では、①におけるT2の動きがヒントとなり、生徒達が自由な発想で思考することができていた。この場面では、「体をゆさぶる」などの短い言葉での説明が主であったが、その後のペアでの実践や、集団思考における仲間との交流を通して、「片側に体を傾けたところから一気に逆への動きを使って」「取の体重をうまく利用することができるので」といった表現が説明に加わるなど、思考がより具体的になったり、根拠をもつように変容しており、【①個人思考／②集団思考／③思考のまとめ】という流れが、生徒達の思考力・判断力・表現力を高める効果的な手立てとなっていた。また、簡易試合を設定することで、考えたことを楽しみながら実践するとともに、アドバイスをし合ったり、応援し合ったりする姿が見られ、生徒達の学習意欲を引き出すことができていた。課題としては、簡易試合において生徒同士の活動では返したかどうか判断しにくい部分があったため、それを補うための手立てを設けることで、活動より円滑に行われると考えられる。